２０２２年1月１６日　高橋克樹牧師　説教『召命』
エレミヤ1章４～１０節、マルコ1章１４～２０節

召命という出来事は、人間の側の準備がととのったところで与えられるものではありません。その人の資格を問わないかたちで、この世に神の支配を告げる働きへと、人を招く神の行為が召命というものです。

さて、イエスが神の国の到来を告げる公の活動を始めたのは、1章１４節にあるように『ヨハネが捕えられた』（原文では『ヨハネが引き渡された後』）ことを契機にしています。イエスは主要な活動舞台であるガリラヤに行き、『神の福音を宣べ伝える』公生涯に入ります。洗礼者ヨハネの逮捕がイエスの神の国宣教の開始を誘発していることは確かです。『引き渡される』（パラディドナイ）はイエスの受難＝十字架を意味する言葉です。ただ、洗礼者ヨハネは人間世界から荒野に退いたのとは反対に、イエスは荒野から当時の人間世界でも差別されていた地域であるガリラヤに赴くのです。

１5節には「今この時は満ち満ちている」「神の支配は近づいた」「悔い改めよ、そして福音を信じなさい」という3つの柱があります。『時（カイロス）が満ちる』という表現は、一定の期間が満ちるということで、数量的に満ちるということではありません。『近づいた』（エーンギケン）という完了形を「到来した」と解することも可能ですが、これを「すぐそばまで来ている」（近づくという語に重点を置くか）と解釈するのか、「もう既にここに来てしまった」（エーンギケンの完了形に重点を置くか）で、解釈は大きく異なります。どちらにしても、イエスの生において神の支配が現在の事柄となっているのです。悔い改めを私たちは何か人間の業のように理解しがちですが、実は心の向きを変えることが字句通りの意味です。どちらにしても、心の向きを変えるのは、神の導きがそこには働いているということです。私たち信仰者にとっての悔い改めは、自分の思い煩いを自分の後ろに投げ捨てて、イエスのもとに帰って行くことです。洗礼者ヨハネはこの世から荒野に退いて、自分の内面に

向き合って、神に立ち帰るプロセスを選んだのですが、このプロセスをイエスは辿りませんでした。

洗礼者ヨハネが訴えた悔い改めは、プロテスタント的で、自分の意志で神に帰依していく意識の面が強い。神と共に歩むために世俗の事柄を捨てるものです。

一方、イエスは荒野からこの世の現実世界に赴いて、神に立ち帰るプロセスを選びました。この世の現実に向き合う姿勢が異なるのです。この世の重荷を担うことで、神が創造された世界の中で生きるのです。この世の十字架を担うから見えてくる世界があるということを示しています。

マルコ福音書が最初に書かれた福音書ですが、その立場はユダヤ教の信仰理解を引き継いでいます。歴史上の具体的な出来事を通して、神は導きを与えるという信仰理解です。自分たちが経験した出来事はみな神との関係において解釈されるのです。実際に生じた出来事がもつ意味を、その出来事の後に生じた事柄を視野にいれつつ、解釈していくので、歴史を形成していく主体としての自分が意識されることになるのです。マルコ福音書の記者はイエスがガリラヤで『神の福音』を宣教したと述べます（１４節）。しかし、イエスの生前に「神の福音」という言葉は存在しませんでした。この言葉はイエスの死後に成立した原始キリスト教会が、イエスの死と復活を中心とする福音を宣教していく際に用いたキーワードです。ですから、１４～１５節の中でイエスが実際に語った言葉は「神の国は近づいた」だけです。これに対して、「悔い改めて、福音にあって信じなさい」と言うのは原始キリスト教会の言葉です。

洗礼者ヨハネは「罪の赦しを得るためには神に立ち帰らなければならない（悔い改めねばならない）」と訴えて洗礼を施していました。一方、イエスは「わたしはあなたがたのただなかに来て罪を贖ったのだから、ただ神の国に入ればよい」と語ったのです。イエスによると、神の国は「力づくで襲われ」ており（マタイ１１章１２節）、人々のところに神の国は「来ている」（ルカ１１章２０節）と語る一方で、神の国に「入ることは難しい」（マルコ１

０章２３～２５節）のだけれども、子どもが受け取るように神の支配を「受け入れる」（マルコ１０章１５節）ならば、誰でも簡単に入ることができると語ったのです。このように神の国という神の支配はただ受容していくものであり、宴会の席に出るのと同じように楽しむことができるところであり、ある場合には、思いがけない宝物を発見するような驚きを人間に与える奇想天外なものであるというのです。初代キリスト教会が「悔い改めなさい。そして福音を信じなさい」（１５節の直訳）と言ったのですが、イエスにとって悔い改めは神の支配を受け入れるための絶対条件ではありませんでした。

１６～２０節を読むと、イエスは４人の漁師を見ず知らずのうちに、ただちに弟子として召します。ルカ福音書記者はこのような召命を不自然と考えたようで、汚れた霊に取りつかれた男の癒し（４章３１～３７節）、シモンの姑の癒しや多くの病人の癒し（４章３８～４１節）の後の宣教活動（４章４２～４４節）をしたのちに、イエスは弟子を召しています。ところが、マルコ福音書では弟子の召命は見知らぬ４人の漁師を即座に召し出しています。また、マルコ福音書ではイエスの宣教活動は最初から弟子と一緒に始まっていて、ここでは、イエスの召しに対する信仰者の「応答」の大切さがクローズアップされています。そして、この応答はただ従順にイエスの後をついていくのではなく、イエスが歩む十字架への道に従っていくことなのです（マルコ１０章５２節参照）。先週の説教で、信仰者はこの世の十字架を背負っていくべきだと申したのですが、それはとてもできないとおっしゃる方がいました。もちろん、人間的に考えれば、他人の十字架を背負うということはなかなかできることではありません。そこに葛藤があって当たり前なのです。そして１６節『シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった』とあるように、二人は漁の真っ最中でした。何かシモンとアンデレに悔い改める個人的な思いがあったわけではないのです。ごく単純に１７節にあるように、『わたしについて来なさい』という召しの言葉によってイエスに従っていくのです、それは、イエスに従うことは、具体的には十字架を背負って生きていく者となることなのです。１８節によると、二人は『すぐに網を捨てて従った』のでした。

ヤコブとヨハネの召しは『舟の中で網の手入れをして』いたところをイエスは召し出すのです。つまり、イエスによる召命においては、召される側の事情は一切考慮されていません。ある日突然に召し出されるのです。『直ちに』ということは、今現在の仕事を途中で中座して何の後始末も行わないで従っていくということです。召される弟子の側に福音を宣べ伝えるための準備などは全くない状態で、また、召命に応える必然性も全くないのです。あるのはただ神の必然性だけなのです。エレミヤの召命記事をみても、『母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の予言者として立てた』とあるように、人間として存在していない前から神の必然があるということが述べられています。エレミヤは神の召しに対して、「わたしは若者にすぎません」（1章6節）と言って、その召しを固辞しています。このように、神による召命は人間の側の悔い改めが必要なわけではないのです。人間の側には召命に対して内面的な葛藤が本来あるものなのです。ところが、イエスの召しにおいて、弟子たちにこの葛藤がありません。しかも、召される人間の側に準備がととのっている様子もないのです。ただ、イエスは「わたしについてきなさい」と言って、彼らが取り組んでいる仕事を中断させて、ついてくるように仕向けているだけです。もちろん、人間の側に悔い改めを求めてはいません。

このようにみてくると、私たち信仰者にとって、召命とは、いま目の前にある自分の課題を投げ出したとしても、イエスがこの世の十字架を背負ったのと同じかたちで、この世の課題を一つ背負ってみることで、見えてくる神が支配する新しい風景を見出すことにあるのです。イエスの弟子たちは、イエスが言った神の国は近づいたという言葉によって、神が支配する新しい現実の到来を信じて召しに応えていったのです。神が支配する新しい現実とは、自分の人生の中に示された神の導きを辿ることで見えてくるのです。